


 随筆

チェコ駐在記

工藤 浩一

1. はじめに

私は2009年3月から2014年3月まで、欧州の3拠点に駐在した。この期間、赴任を含め5回の異動を命じられ、結果的にチェコとドイツは2度の赴任となった。下記に赴任回数とその場所を示す。

- 1回目：チェコ・パルドビツェ（1年9カ月）
- 2回目：スペイン・パンプロナ（10カ月）
- 3回目：ドイツ・デュッセルドルフ（7カ月）
- 4回目：チェコ・パルドビツェ（1年5カ月）
- 5回目：ドイツ・デュッセルドルフ（6カ月）

その中で、合わせて3年2カ月間の一番長かったチェコ（KYB Manufacturing Czech s.r.o.：以下KMCZ）駐在について振り返り、その一部を紹介したいと思う。

2. チェコの概要

1989年まで、共産党による独裁が続いたチェコスロバキアは、1993年にチェコ共和国とスロバキア共和国に分離した。今でも、ドイツやスペインの多くの人たちはこの国をチェコスロバキアと呼んでいる。その後、チェコは1996年にOECDに加盟、1999年にNATO加盟、そして2004年にはEU加盟国となった。

人口約1,050万人、ヨーロッパのほぼ中央に位置し、北緯50度と緯度は高いが面積も気候も北海道とほぼ同じくらいで、地震も無く、自然災害も少ない国である。

高速道路や鉄道のインフラが整備されているため、西側だけでなく東側へのアクセスも良く、自動車、機械、電機など、EU諸国向けを中心とした輸出産業が盛んである。国を挙げての海外企業誘致や投資の促進政策もあり、製造業を中心に、約230社の日本企業がチェコに進出し操業している。

私の見たチェコ人は、まじめで勤勉、決めたルールはきちんと守る。頑固な一面もあるが、これが伝統や自然・環境を大切に守る姿となり、この美しい街並みや素晴らしい景観が維持されているのだと思

う。

古い家は建替えるのではなく、一部の壁は壊さずそのまま利用して改築が行われる。古い家具は長く大切に使う。どの家も窓をきれいに磨き上げ、窓辺には外からもよく見えるよう季節の花を飾り付ける。

伝統や昔からの文化を大切にする一方、新しいものを取り入れる意欲も旺盛であり、現代のものと古いものをうまく使い分け、融合させることも上手い。

気難しい年配者も確かにいるが、若者たちは自由闊達、かつての独裁国家の面影は全くない。女性は総じて男性より強く、素直で明るい。男性は見かけとは全く異なり少し頼りなく、どちらかと言うと弱々しい印象を受ける。

3. 当時の状況

チェコへの赴任を知らされたのは、リーマンショックの直後、欧州の自動車販売が大きく落ち込み回復見込みが見えない時期だった。

チェコに進出した日系企業の多くは、リストラや工場撤退など生き残り策が検討されていた。銀行による貸し剥がしが行われ、多くの拠点では逼迫する資金繰りについて対応に奔走していた。欧州危機が叫ばれる中、明るい話は全くない状況だった。EU加盟国では、自動車の買い替え奨励金等、景気刺激対策が施行された。

このような状況の中、欧州でも車の売れ筋は、高級車や大型車・中型車から廉価な小型車へ向かっていた。KMCZの製品構成は、小型車向けショックアブソーバ（以下SA）が中心であったことも幸いし、大きな打撃は比較的少なく、2010年3月期には、創立以来、初めての黒字決算となった。

赴任当初のKMCZには、合弁パートナーであった三菱商事社からの駐在員が1名いた。主な業務を私が引継ぎ、同社の駐在員は帰任した。

KMCZは2011年に資本構成が変更となり、KYBの100%子会社となった。同時期に財務体質強化のため、増資が行われた。

その後、受注確定に伴い増産のための準備が始まり、これがKMCZの大きな転換時期となった。

2012年の春、2度目のチェコへの駐在となった。チェコ人の工場長（当時）が社長に昇格する人事が発令された時だった。

2012年の夏から翌2013年6月にかけての期間は工場拡張計画の立案が行われ、早朝の日本とのテレビ会議、岐阜北工場からの長期出張者による支援、KMCZ内での連日の打ち合わせ、地元自治体（州や市）への拡張申請、工場拡張に反対する近隣住民への説明会、設備投資インセンティブ（優遇制度）を受けるための準備や資金計画など、数多くの対応に迫られた。

帰任時には拡張計画がいよいよ現実となり、工事開始の段階となっていた。現在では、2倍の規模に拡張された工場建屋がほぼ完成し、機械の据え付け工事が進んでいる。



写真1 KMCZの工場外景（手前は既存建物、奥が拡張部分）

4. 食堂メニュー向上委員会

チェコの多くの人たちは、1日の食事の中で昼食に重点を置く。スープとメインディッシュを基本とした昼食が重要と考えているようだ。

KMCZでは、社員食堂で全員が昼食を食べることができる。メニュー4種類に加え、一部アラカルトやサンドイッチなども選択できる。価格は半額会社補助により安く、そのボリュームや味についても現地人社員には評判が良かった。

月に一度、総務・人事、購買のメンバーと駐在員代表として私も加わり、食堂改善委員会を開催し、食堂メニュー改善のために意見交換や満足度の調査を行った。同じ工業団地内のジェイテクト社とパナソニック社へお願いし、各社の社員食堂での試食会

を行ない、献立や食堂レイアウトなど良いところを皆で学んだ。

KMCZの社員は寿司以外の日本食にも関心が高く、和食勉強会では、パン粉を使ったトンカツ・チキンカツのほか肉ジャガ、カレーライスの味の向上を目指した。

しょうゆは多くのチェコ人が知っていたが、調味料として日本のトンカツソース（お好み焼きソース）やウスターソースが、大変評判が良いことがわかり、その後、日本製のトンカツソースは食堂の定番調味料となり、我々駐在員も喜んだ。

社員食堂の満足調査では7割以上の社員から「非常に満足」の最高評価が得られた。



写真2 社員食堂メニュー

5. チェコのビール

チェコはピルシュナービール発祥の地。一人あたりビールを飲む量が世界で年間350リッターとは驚きである。飲む人は毎日1リッター以上が当たり前のお国柄である。

街にはたくさんのビアホールやパブがあり、いつも混雑している。家で夕食を済ませた後、グループやカップルでここに来て、大きなジョッキでビールだけを飲みながら楽しそうに語り合う光景をよく見かける。不思議なことに、値段はどの店でもミネラルウォーターよりも安く、ジョッキの中身が少なくなれば黙っていても次のビールが運ばれてくる。

スーパーマーケットや酒屋ではケース入りの瓶ビールが大量に売られている。売り場の脇には、どの店にもビール瓶の回収コーナーがあって、空き瓶を大量に持った客が回収箱に返却する光景がよく見られる。皆がビールをたくさん飲んでいることの証しである。



写真3 ビール工場から出来立てのビール

6. アイスホッケー

チェコのウインタースポーツと言えば、アイスホッケー。冬季オリンピックでは過去に1998年の長野大会で金メダル、2002年トリノでは銅メダルの実績がある国民的スポーツである。

地元のプロチーム「イトン・パルドビツェ」は、市民の誇りである。市の中心部にとっても立派なホッケースタジアムを有し、週末に行われる試合は、いつも満席となっていた。選手の奮闘（まさに格闘技）と市民の熱い応援の姿をリンク脇で見ていると本当に圧倒される。KMCZの社員も観戦だけでなく、子供の時から実際にプレイをする。近くに住む人たちがアイスホッケーチームを作り、対抗戦を行っている。仕事を終えてから練習を行い、週末には試合に出場するという、とても身近なスポーツである。

私もホッケーシューズ、ヘルメット、手足に付けるプロテクターなど道具一式を買い込み、練習し、何度か実際にゲームに参加した。格闘をしなくても、5分もリンク上に立つだけで全身が痛くなる。冬には週末になると近場のアイススケート場に出かけ汗を流したものだ。



写真4 パルドビツェのアイスホッケーアリーナ

7. プラハへの買い出し

週末は駐在員仲間とプラハの日本食材店へ買い出しによく出かけた。そのついでに、プラハの和食レストラン巡りも数少ない楽しみの1つだった。

日本食材はパルドビツェでは入手困難であり、片道約130km、車で1時間半をかけてプラハへ行くことも別に苦にならなかった。当時は2軒の小さな日本食材店があり、通常の4～6倍くらいの価格で販売されていた。納豆の3個パック（冷凍もの）が500円位だったが背に腹は代えられない、毎回買い占めた。日本食ブームの影響か、チェコ人の買い物客も散見された。

プラハは中京地区（名古屋）からの駐在員が多いためか、味噌は八丁味噌（赤だし）がメジャー、味噌かつ用ソースなどもそこではよく見かけた。店主のマーケットリサーチの結果なのか、関東では見かけない商品も置いてあり、買い出しは面白かった。

プラハの日本食レストランでは、鰻の蒲焼が「ひつまぶし」風の盛り付けだったり、トンカツに最初から味噌ダレがかかっていたりするのが和食の標準形のように笑えた。駐在員にとっては、チェコで和食が食べられるだけで有難いことだった。

当初は慣れないチェコでの自炊生活も、年を重ね、コツがわかってくると改めて料理の大変さとその有難さを感じた。

8. 世界遺産めぐり

12ヶ所（当時）あったチェコ内の世界遺産をすべて回った。

パルドビツェから車か電車でほとんどの場所に日帰りが可能である。鉄道で週末の2日を利用すればゆっくり見ることもできた。



写真5 チェコの鉄道（パルドビツェ駅）

プラハヤクトナーホラの歴史的建造物、チェスキー・クルムロフの中世の姿を今に伝える美しい街並み、ホラショビツェの素朴な農業集落などまるで絵画の中にいるような錯覚に落ちる。

隣国ポーランドのアウシュビッツ収容所へも足を



写真6 ホラショピツェの農村風景

運んだ。ヒットラーによるユダヤ人大虐殺の現場や捕虜としての収容者の写真や多くの遺品、ガス室までも当時のまま保存されていた。重苦しい気持ちでアパートへ帰ってきたことを昨日のように思い出す。

地図と時刻表を片手に、先導し、一緒に付き合ってくれた駐在員に感謝している。

9. 交通マナー

チェコ人の運転マナーはとても良い。私も不安なく運転することができた。しかし、チェコには日本と異なるルールや日本の常識では考えられないものもあった。

規則を守ることにについて厳格なこの国は、速度違反に対しても容赦なく切符が切られ、罰せられる。スピード取締が行われている場所は、制限時速を5キロのオーバーでアウト。カメラによる自動取締機械も同様に厳しく、日本の感覚で運転しているとひどいことになる。1日のうちでパルドピツェとプラハを往復ただけで、5キロオーバーの違反切符を3枚も切られたという駐在員神話がある。チェコらしいことは、カメラ取締機の設置場所に必ずカメラ撮影開始地点と終了地点にも標識があり、100メートルほどの区間内に掲示されており、設置されたカ

メラの位置がハッキリわかる。

住宅地に入り、制限速度が始まる場所にはデジタルの速度表示計が設置されており、ドライバにその都度スピード超過の注意を促している。

日本には存在しないルールとして、右側から出てくる車に対して道を譲る（右側車両優先）というものがある。特にスーパーマーケットなどの広い駐車場内の標識の無い通路の走行では十分な注意が必要である。

公道のすべての交差点には、優先・非優先の標識が設置されている。どんな狭い、小さな交差点にも必ず設置されており、道路の広さに関係なく（広い道路が優先道とは限らない）この標識が表示する優先・非優先に従わなければならない。信号機のある交差点にもこの標識が表示されており、万一、停電等で信号が消えているときは、この標識に従って優先・非優先が決められるため、これを見落とすと大変なことになる。

チェコのマナーは日本のそれに勝る。スピードに関してだけでなく、歩行者に対するドライバの配慮も同様であり、見習うべき事項が多々あった。

10. おわりに

私にとって長い単身赴任であったが、心身共に大きな問題はなく、何とか無事に過ごせた幸運に感謝している。

海外での仕事や日常生活では気付かぬうちに大きなストレスや疲労が溜まるもの。駐在員及び今後駐在される方々には、この点十分ご留意されたい。

末筆ですが、この5年間、多大なご支援・ご協力いただいた本社機能部門、AC事業本部、岐阜北工場、KMCZの駐在員・現地社員、欧州拠点はじめ多くの関係する方々に御礼申し上げます。

チェコ人と日本人とがお互いに力を合わせ、幾多の困難を乗り越えて、KMCZが更に大きく成長することを願っております。

著者



工藤 浩一

1983年入社。経営企画本部広報部長。経理部、シカゴ駐在、営業管理部、欧州駐在を経て、現職。